

地方銀行の役割変化とその歴史的背景、 1868-2020 ～とくに秋田の銀行に関して～

川村 裕太郎

【要旨】

本論文では、地方銀行の役割変化を歴史的背景から調査した。現在の技術が進歩し、銀行がなくなる、もしくは人手がさらに少なくなっていくといわれている。とくに地方は人口が減り、近い将来は銀行の支店は減少していく一方である。もし、そうなれば、経営が困難になり銀行の役割ができなくなり、最悪潰れるケースも出てくる。そのため銀行がなくならないためにも、合併や統合を繰り返す、ネット上ですべての業務が行なえることやロボットを導入し、人件費を削減するといった選択肢は様々である。しかし、そうなれば支店が減り、銀行を利用する時に遠いところまで足を運ばないといけないのである。これはお年寄りの方からすればとても不便であり、明治から引き継いできた人の繋がりがなくなるのではないだろうか。以上のようなことにならないようにするためにも、人の繋がりとということの大切さを再確認していかなければならないことである。

【講 評】

日本の近代史の大きな枠組の中で、秋田県の銀行を事例として取り上げ、地方銀行の役割の変化を、銀行を取り巻く環境の変化から解明している研究論文である。産業や金融の秋田県に特有な状況を浮き彫りにし、その歴史を明治から平成にわたり丁寧に論述している説得力ある論文として評価できる。

今後、銀行の支店網がネットバンクの普及や人件費の観点から減少していくことが予想される中、地方銀行の支店の社会的な役割の一つとして地域の顧客との繋がりの大切さを再認識させられる論文となっている。